熊の作遺跡出土「木簡」について

宮城県教育庁文化財保護課

1. はじめに

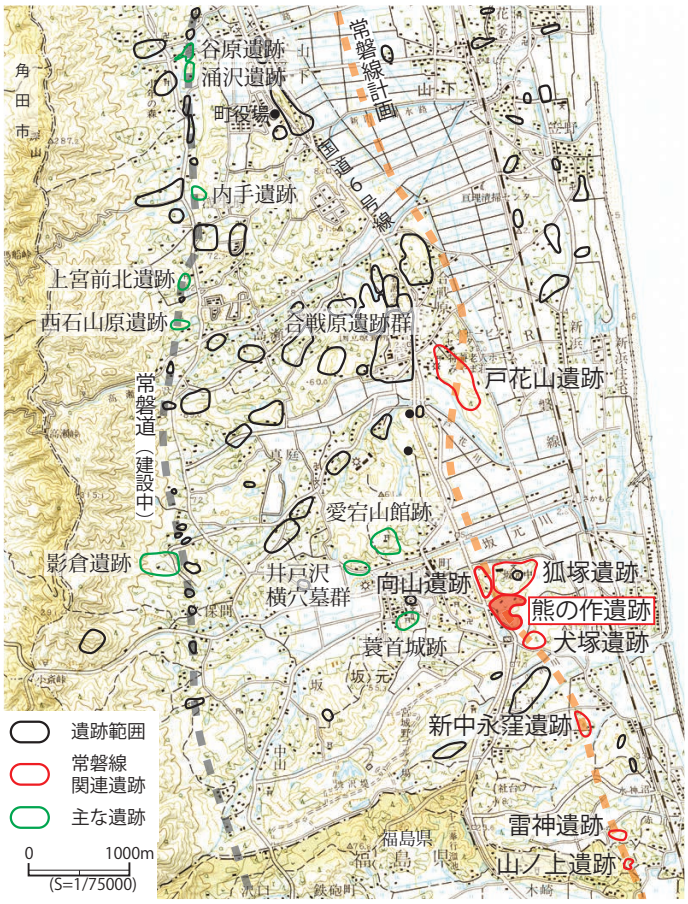
山元町では、東日本大震災により不通となっている常磐線の移設事業が進められています。町南部の坂元地区には、計画路線内に戸花山（とはなやま）遺跡など 8 遺跡が確認されており、縄文時代～中世の遺構・遺物が見つかっています。宮城県教育委員会では平成 25 年 4 月 15 日から、これらの遺跡の発掘調査を実施しています。震災からの復興事業として、他県市職員の応援も得て、早期の調査終了を目指しています。

2. 熊の作遺跡の概要

熊の作（くまのさく）遺跡は町の南東部、坂元中学校南側の丘陵（標高 10 ～ 20m）にあります。北側に隣接して狐塚（きつねつか）遺跡や向山（むかいやま）遺跡があり、いずれも古墳時代～平安時代を中心とする遺跡です。

熊の作遺跡の範囲は南北約 300m、東西約 250m ありますが、そのうち計画路線範囲内（約 2,400 ㎡）の発掘調査を行いました。その結果、7 ～ 9 世紀（今から約 1100 ～ 1400 年前）の掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）、竪穴住居（たてあなじゅうきょ）、柱列、溝などが多数見つかりました。特に、遺跡の中央部分にあたる丘陵南側斜面に、奈良～平安時代の大型の掘立柱建物、竪穴住居などが分布しています。建物群の南西側の低地には、湿地の層が堆積し、古代の柱や木製品が良好な状態で残っていました（※）。木簡（もっかん）はこの湿地の層から出土しました。

（※通常、土に埋もれた木製品は腐って残りませんが、水に浸かった状態では腐らずに保存されます。）



第 1 図 常磐線と山元町の遺跡分布

写真① 上空からみた熊の作遺跡周辺 (南西から)

写真② 建物群と木簡の出土地点 (左が南東)

3. 出土した木簡について

木簡とは、短冊状の木の板に文字を記したもので、紙が貴重だった古代には行政文書などによく用いられました。

熊の作遺跡から出土した木簡は、長さ 31.9cm、幅 3.6cm、厚さ 0.7cm で、左辺は割れています。文字は一部不鮮明ですが、赤外線写真で見ると「信夫郡安岐里人　大伴部法麻呂」以下、計 4 人の名前が書かれていることが分かります。信夫郡安岐里は現在の福島県福島市と川俣町の境付近にあたり、熊の作遺跡がある山元町坂元からは直線距離で南西に約 40km 離れた場所になります。この木簡は、信夫郡安岐里に本籍をもつ大伴部法麻呂などの男性を管理するための名簿と思われます。また、安岐里の「里」という表記方法から、大宝令の郡里制が施行された時期（西暦 701 ～ 717 年）に使用された木簡と考えられ、語句から年代の分かる木簡としては東北地方で最古級のものとなります。

熊の作遺跡及び隣接する向山遺跡では、これまでの調査で製鉄に関わる遺構や遺物が出土しており、木簡は製鉄関連の作業に亘理郡以外の人が動員されていたことを示す資料と考えられます。また、熊の作遺跡で見つかった大型建物からは、製鉄を管理する有力者の存在もうかがえます。なお、木簡が出土した湿地部からは「坂本願」と墨書された奈良時代の土器も出土しており、坂元地区の起源である「坂本里」がこの周辺にあったことがわかります。

〈釈文〉

信夫郡安岐里人

大伴部法麻呂　丈部伊麻呂

大伴部●麻呂　丈部黒麻呂

（左辺は割れています。●は不明です。）

〈赤外線写真〉

〈実物写真〉

写真③ 木簡の出土状況

写真④ 墨書土器「坂本願」

調査協力　東日本旅客鉄道株式会社
山元町教育委員会
宮城県多賀城跡調査研究所